五感（Five senses）表現について

舒　　志田

1．はじめに

通常、新しい言葉や表現は新しい概念または新しい物や出来事に伴って生み出されるケースが多い。一方、在来の表現に対して何らかの不都合などが感じられ、新たに別の表現をもってそれを再命名するケースもある。感覚表現のうち、五感を表す「視覚」、「聴覚」、「嗅覚」、「味覚」、「触覚」といった言葉がこのケースに属するかと思われる。

本稿は、この五感表現を中心に、語誌的な考察を加えながら、主に近世以降の日中間における「新漢語」の交流史を垣間見たい。

「視覚」、「聴覚」、「嗅覚」、「味覚」、「触覚」の五語について、中国語サイドでは、『漢語大辞典』に見出し語としては挙げられているが用例がいずれも新しいものである。『近現代漢語新詞詞源詞典』（香港中国語文学会編集、漢語大詞典出版社、2001年）には、「視覚」、「聴覚」、「嗅覚」の三語が収録されている。

一方、日本語サイドでは、『日本国語大辞典』にはそれぞれ見出し語として挙げられているが、用例がいずれも新しいものである。『現代に生きる幕末・明治初期漢語辞典』（佐藤亨、2007年）には、「視覚」、「味覚」が挙げられている。

2．「五感」についての認知

五感というのは感覚（Sensation）に属するものであり、現代医学（生理学）では、感覚とは体外あるいは体内の状況を意識の上であるいは無意識に認知することをいう。また、感知される情報の内容、伝達様式などによって多様に分類されており、その分類自体は確定してはいないが。感覚は凡そ下記のように分類することができる。(1)

① 特殊感覚 Special sense：嗅覚、味覚、視覚、聴覚、平衡感覚
② 一般感覚 General sense：体性感覚、内臓感覚
②-1：体性感覚 Somatic sense：触覚（触、圧、振動）、温度覚、痛覚、固有感覚
②-2：内臓感覚 Visceral sense：内臓がどのような状態にあるのかの情報を中枢に送る感覚

アリストテレス（Aristotelēs、前384-前322年）は『霊魂論』でヒトの感覚を初めて分類し、視覚、聴覚、触覚、味覚、嗅覚の５つがあるとした。これが広く知られる五感であり、通常、われわれもこの概念で感覚のすべてを捉えているのである。個々の感覚には個人差などが見られたりするが、五感もまた国境や人種を越えて、この地球に生息する人間共通の感覚だといって良かろう。

2.1　中国古代における「五官」〈五感〉の認識

漢字文化圏に限って言えば、中国では遥か春秋戦国時代に、「心身問題」を論じる際、この五感というものが既に認識されているようである。たとえば、孟子（前372年-前289年）の『尽心篇・下』には、次のような記述ある（下線は筆者による、以下同）。

> 口之于味也，目之于色也，耳之于声也，鼻之于臭也，四肢之于安佚也，性也，有命焉，君子不謂性也。仁之于父子也，義之于君臣也，礼之于賓主也，知之于賢者也，聖人之于天道也，命也，有性焉，君子不謂命也。

これは、荀子（前313- 前238年）に至ると、「耳目鼻口身（形体、形態）」による五感がやがて、「心」によって支配される「五官」[(2)] として認識されるようになる。

> 凡人有所一同：飢而欲食，寒而欲暖，労而欲息，好利而悪害，是人之所生而有也，是無待而然者也，是禹桀之所同也。目辨白黒美悪，耳辨声音清濁，口辨酸咸甘苦，鼻辨芬芳腥臊，骨体肤理辨寒暑疾養，是又人之所常生而有也，是無待而然者也，是禹桀之所同也。（荀子・栄辱）

> 天職既立，天功既成，形具而神生，好悪喜怒哀楽臧焉，夫是之謂天情。耳目鼻口形態各有接而不相能也，夫是之謂天官。心居中虚，以治五官，夫是之謂天君。　（荀子・天論）

> 然則何縁而以同異？曰：縁天官。凡同類同情者，其天官之意物也同。故比方之疑似而通，是所以共其約名以相期也。形体、色理以目異；声音清濁、調竽、奇声以耳異；甘、苦、咸、淡、辛、酸、奇味以口異；香、臭、芬、郁、腥、臊、洒、酸、奇臭以鼻異；疾、痒、凎、熱、滑、鈹、軽、重以形体異；説、故、喜、怒、哀、楽、愛、悪、欲以心異。心有征知。征知，則縁耳而知声可也，縁目而知形可也。然而征知必将待天官之当簿其類，然後可也。五官簿之而不知，心征知而無説，則人莫不然謂之不知。此所縁而以同異也。　（荀子・正名）

また、1973年に湖南長沙馬王堆第三号漢墓では出土された帛书及び、1993年に湖北荆門郭店村第一号楚墓で出土された竹簡には『五行』という一篇があり、この中にも似たような記述ある。

> 耳目鼻口手足六者，心之役也。心曰唯，莫敢不唯；諾，莫敢不諾；進，莫敢不進；後，莫敢不後；深，莫敢不深；浅，莫敢不浅。和則同，同則善。

> 耳目鼻口手足六者，心之役也。耳目也者，悦声色者也。鼻口者，悦臭味者也。手足者，悦佚愉者也。心也者，悦仁義者也。此数体者皆有悦也，而六者为心役，何也？曰：心貴也。有天下之美声色于此，不義，則不聴弗視也。有天下之美臭味于此，不義，則弗求弗食也。居而不問尊長者，不義，則弗为之矣。何居？幾不勝也，小不勝大，賤不勝貴也哉！故曰心之役也。耳目鼻口手足六者，人体之小者也；心，人体之大者也，故曰君也。

中国古代思想史における「身心問題」とは、自然と人間・社会とからなる世界において、人間が如何にして主体性を獲得するかという問題である。思想家たちがこれを追求するようになった

とき、初めて人間の内面に身体諸器官とは異なって、その主体性を担うに足るものがあると考えて措定したのが「心」であった。この心が「耳目鼻口身（または形体、形態、手足、四肢など）」という身体諸器官を通じて獲得された感覚・認識及び感覚・欲望の機能を支配しており、支配があって始めて、人間は身体的物質的世界において疎外を免れて主体的であることができるという。[(3)]

特に、荀子は「目辨白黒美悪、耳辨声音清濁、口辨酸咸甘苦、鼻辨芬芳腥臊、骨体肤理辨寒暑疾養」というように、「耳目鼻口身」を現在風に言えば感覚器官として認識し、各感覚器官経由のそれぞれの感覚が「心」によって「徴知」つまり認知され支配されると説いているのである。

但し、荀子の考えがその後、中国の思想史において如何に継承されていたのか、本稿の主旨から離れるのでここでは深く立ち入らないことにする。

一方、仏教では「眼耳鼻舌身意」を「六根」（梵語 Sadindriya）と言い、六根の作用対象の「色声香味触法」を「六境」と称し、六根の認識結果を「六識」と呼んでいる。649年、インドより帰還した玄奘の訳とされている『般若心経』には[(4)]、

> 舍利子，色不異空，空不異色，色即是空，空即是色，受想行識亦复如是。舍利子，是諸法空相，不生不滅，不垢不净，不增不減。是故空中無色，無受想行識，無眼耳鼻舌身意，無色声香味触法，無眼界乃至無意識界，無無明亦無無明尽，乃至無老死，亦無老死尽，無苦集滅道，無智亦無得。

仏教における「眼耳鼻舌身意」が並列的な関係に対して、先秦諸子の身心問題における「眼耳鼻舌身心」が「心⇒眼耳鼻舌身」という統摂的な関係にある。後に、朱子は仏教の六根が先秦諸子の身心問題に関する諸概念を盗んで転用したにすぎないと指摘したことがある。

> 宋景文唐書贊，說佛多是華人之譎誕者，攘莊周列禦寇之說佐其高。此說甚好。如歐陽公只說箇禮法，程子又只說自家義理，皆不見他正贓，卻是宋景文捉得他正贓。佛家先偷列子。列子說耳目口鼻心體處有六件，佛家便有六根，又三之為十八戒。　（朱子語録・釈氏）

なお、中国古代の医学における「五官」とは上記の両方とも違う様相を呈し、「五官」というのは鼻目口舌耳と指しているのである。

> 黄帝曰：愿聞五官。岐伯曰：鼻者，肺之官也；目者，肝之官也；口唇者，脾之官也；舌者，心之官也；耳者，腎之官也。　（皇帝内経・霊枢経）

つまり、現代風の五感というのは古代医学の知識よりもむしろ先秦諸子の思想を下敷きに成立したものと考えられる。そして、この両者がマッチしたのは近世以降、西洋解剖医学の伝来により始めて実現されるようになる。

2.2　初期漢訳洋書における五感認識

1552年８月、スペインの宣教師の聖・方済各・沙勿略（St. Francois Xavier, 1506-1552）が中国広州の上川島に上陸して以来、西洋の宣教師たちが各自の信仰のもとで夢を抱きながら中国に渡ってきた。宣教師らはその布教活動を展開するために、多くの教義書を著した。また、布教に際し

て彼らは西洋の数学、天文学、地理学、物理学、兵学及び医学など、当時に於いて比較的に進んだ科学知識をも中国に紹介していたのである。

こういった宣教師らの著述が近世ないし近代中国の学術思潮に多大な影響を及ぼしたことは、数多くの先学の研究に指摘されているし、また、これらいわゆる漢訳洋書が日本にも将来されて、近世・近代日本の学術や文化にも寄与したことは一般的に認められた事実である。

上記のような明末清初の漢訳洋書のうち、医学関係書が全体の数から言うと少数にすぎないが、『泰西人身説概』及び『人身図説』(1623年)[5]、『性学觕述』(1623年)、『医学原始』(1688年)の三種類がまず挙げられる。ここでは、五感について改めて上記三書における記述を見ておこう。『泰西人身説概』巻下において、「五官」について、次のように述べている。

> 人生而具五官也、以能容受外来万物之所施、即送至脳中與総知覚之司、如置郵伝命者然。
> (泰西人身説概・巻下・総覚司)
> 凡両間万物所発現者、有五種、如顔色、如声音、如香臭、如滋味、如冷熱等、皆人類而設。所以天主生人五官、能受外物所施、如戸牖然。 (泰西人身説概・巻下・目司)

そして、「目司」「耳司」「鼻司」「舌司」「四体覚司」について、問答式でそれぞれの構造や機能などを説明しているが、そこにはまだ「視覚」「聴覚」「嗅覚」「味覚」「触覚」の各語が見出せない。

『性学觕述』はイタリア人宣教師のアレニー(艾儒略、Giulio Aleni. 1582-1649)[6]の著作であり、その内容について、徐宗澤(1949)『明清間耶蘇会士訳著提要巻四・神哲学類』(中華書局、1989年影印)では、次のように紹介している。

> 西極艾思及先生著,耶蘇会士陽瑪諾,黎寧石,伏若望同訂,司会傳汎際准梓,江右後学朱時亨較刊;順治三年刊(一六四六),有海虞瞿式耜伯略父序,閩中陳儀序,南州朱時亨徳先生序,及艾公自序,惟艾公之序作於天落甲子(一六二三)。是書共八卷;第一第二卷論畫魂及其性体,第三卷論生長等,第四卷論五種覚官,第五卷論知覓內職,第六卷論覓性霊性,第七卷論記心,論夢,第八卷論夭寿等等。此書可謂心理学之常識,而離以弁論,於吾国民衆之謬解,随論斜正,雖是哲学書之一,但文筆万不及名理探超性学要等雅麗也。(pp.210-211)

『医学原始』は王宏翰(1648-1700、字恵源)の著作で、その巻一、巻二の内容は殆んど『性学觕述』に依っている。

> 但知覚之能、分而有三:一為外覚、一為内覚、一為発用。外者五官、亦称五職:曰目、曰耳、曰鼻、曰口、曰体也。内者四司、亦称四職:曰総知、曰受相、曰分別、曰渉記。総為九覚、亦称謂九職也。至其発而為用、則嗜欲運動二職該焉。〈中略〉又色為目界、声為耳界、嗅為鼻界、味為口界、寒暑等為体触界是也。 (医学原始・巻二・知覚外官総論)

次に「目之視官論」「耳之聞官論」「鼻之嗅官論」「口之啖官論」「身之触官論」と各論を展開しているが、ここに「視覚」「触覚」の二つの表現が現われる。

> 夜半乍醒、目中発光、能見室中之物、即可読数行之書、俄頃遂滅、何也?曰:乃繇視覚之気、

自脳至目、原具内光、或人此気甚旺、睡久更聚、其目乍開、其光迸出。

（医学原始・巻二・目之視官論）

身為触之官、触覚之用、遍体有之。〈中略〉然触覚之原、則有一絡、生自脳中、帯動覚至細之徳（筆者傍注：神経のこと）、布遍周身、而為触之能、使知覚諸情。故覚者、頼此無算細筋所通之皮肉、若無皮肉、則亦不能触覚。〈中略〉大体人之血気愈清美者、其触覚愈精細。〈中略〉独四体触覚、人得最精、雖四末之処、稍有豪之刺、風雪之着、無不触覚冷熱痛痒也。

（医学原始・巻二・目之視官論）

上記三書に於ける五感に関する表現を整理すると、次のようになる。

資 料 名	年代	視　覚	聴覚	味覚	嗅覚	触　覚	五　官
性学觕述	1623	視官、視覚	聞官	啖官	嗅官	身之触官、触覚	五官、五職
泰西人身説概	1634	目司	耳司	舌司	鼻司	四体覚司	五官
医学原始	1688	視官、視覚	聞官	啖官	嗅官	身之触官、触覚	五官、五職

なお、上記医学関係書以外の漢訳洋書、例えば、アレーニの『三山論学記』（1625）[7]、及び南懐仁の『新製霊台儀象志』（1674）にも「触覚」の用例が見られる。

生物有三種。下者則生而無覚、草木是也。中者生覚而無霊、禽獣是也。上則生覚霊三能倶備、人類是也。故魂亦有三種。一為生魂、一為覚魂、一為霊魂。生魂助草木発育成長、覚魂助禽獣触覚運動。二者囿於形、根於質、而随物生滅。所謂有始有終者是也。若人之霊魂、為神妙之体、原不落形、不根質、自無更易聚散之殊。故雖人身倶生、必不與人身倶滅。所謂有始無終者是也。（三山論学記）

相国曰、天地之間不離順逆二境。人之閲世不離苦楽二情。然当苦楽之遭而身受之者。以其有五官百骸之用。故耳司聴。目司視。口司啖。鼻司臭。四体司覚。死則一具白骨。（三山論学記）

四元行中、惟気行最為易変、〈中略〉而大概則自冷熱乾湿而来、然能験其為然者、則全頼人触覚之官。蓋人之五官所司、惟触司頑鈍而不能顕証其気細微之変（其触司所以能覚有頼一身脈絡所通之肌膚）。（新製霊台儀象志・巻四　「験気説」）

2.3　後期漢訳洋書

ホブソンの『全体新論』（1851年）では、「第八脳為全体之主論／第九眼官部位論／第十眼官妙用論／第十一耳官妙用論／第十二手鼻口官論」との各論があるが、「視覚」「聴覚」「嗅覚」「味覚」「触覚」の各語が見当たらない。彼が編纂した医学用語集『MEDICAL VOCABULARY IN ENGLISH AND CHINESE 医学英华字释』（1858年）にも出見出せない。

The source of sensation　脳知覚之原
THE SENSE OF SIGHT　眼官体用
THE SENSE OF HEARING　耳官体用

THE SENSE OF TASTE　口舌之官体用
THE SENSE OF SMELL　鼻官体用
THE SENSE OF TOUCH　手知覚功用

なお、ホブソンの『全体新論』以降十九世紀末までに、宣教師の手による主な医学関係書はまだ多くある。「全体」を命名したものだけでも、徳貞の『全体図説』(1875) 及び 『全体通考』(1884)、柯為良の『全体闡微』(1881)、稲維徳の『全体図説』(1884)、傅蘭雅の 『全体需知』(1885)、賀路綏の『全体入門問答』(1902) などがある。[8]

筆者はまだこれらの書物を目にしていないため、断言できないが、同時期で五感を専門的に論じた『知識五門』(慕惟廉撰、1887)[9] には、「視覚」「聴覚」「嗅覚」「味覚」「触覚」の各語は見当たらなかったのである。

2.4　英華・華英辞書類

そこで、英華・華英辞書類ではどうなっているかを調べてみると、「視覚」「聴覚」「嗅覚」「味覚」「触覚」が訳語として収録されたのは1908年の顔惠慶『英華大辞典』以降である[10]。

資　料　名	年次	詞目(Iterm)	内　　容
馬禮遜英華字典	1822	Senses	The Chinese, 五官, are commonly translated the Five senses; but it is difficult to include one of the number under that appellation: they are 耳目口鼻眉, `the ears, the eyes, the mouth, the nose, the eyebrows
衛三畏英華韻府歴階	1844	SENSES	SENSES, five　五官
麥都思英華字典	1847	SENSES	the five senses 五官、五司
1866-69羅存德英華字典	1866	Sense	the five senses 五官、五司
		Function	functions of the five senses 五官功用
		Sensorial	官的、司的、五官的
		Sensorium	organ of sense 五官部位
		Subservient	sense is subservient to fancy 五官輔幻想
盧公明英華萃林韻府	1872	Disabled	Disabled by illness, 懦弱無能、五官不齊
		Muscles	Muscles of the five senses, 五官肌肉
		Senses	five Senses 五官、五司、耳目口鼻身 functions of the 5 Senses 五官功用
井上哲次郎訂増英華字典	1884	Sense	the five senses 五官、五司
		Function	functions of the five senses 五官功用
		Subservient	sense is subservient to fancy 五官輔幻想
		Sensorium, Sensory	organ of sense 五官部位
鄺其照華英字典集成	1899	Sense	the five senses 五官
		Sensorial	官的、司的、五官的
		Sensorium	organ of sense 五官部位
顔惠慶英華大辭典	1908	Sense	The faculty of perceiving what is external by means of impressions on an organ, 知覺, 覺性, 覺官, 官能, 知覺各官之一, 身上各體感觸外物之知覺能力; as, the function of the senses, 官之用; the five senses, 五官, 五司 (口, 鼻, 目, 耳, 心); the sense of hearing, 聽覺, 耳司聽; the sense of sight, 視覺, 目司視; the sense of taste, 味覺, 口司味; the sense of touch, 觸覺, 膚司捫; the sense of smell, 臭覺, 鼻司嗅
		Sight	The faculty of vision, 視覺, 視官, 視力; as, a good sight, 好眼力; a weak sight, 視力弱

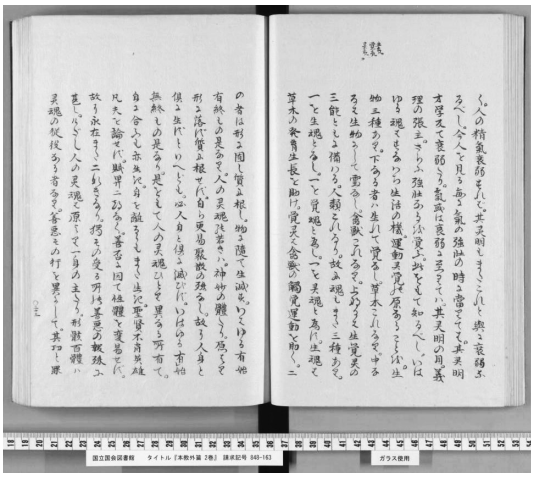
顔惠慶英華大辭典	1908	Binocular	Pertaining to both eyes, 屬於兩眼的; employing both eyes at once, 雙目並用的; as, binocular vision, 雙目並用之視覺
		Optic, Optical	Relating or pertaining to vision, or to optics, 視覺的, 視力的, 光學的;〈下略〉
		Visual	Pertaining to sight, 視官的, 視力的, 視覺的, 眼光的, 目力的;（以下略）
		Ear	The sense of hearing, or rather the power of distinguishing sounds and judging of harmony, 聽官, 聽覺, 聽感, 助;（以下略）
		Nose	The power of smelling, 嗅力, 嗅覺
		Smell	The power or faculty of smelling, 聞嗅之官, 聞嗅之能力, 嗅感, 嗅覺; as, infants have scarcely any smell, 嬰兒聞官不靈; the aged have a keen sense of smell, 老人齅覺甚靈
		Smelling	The sense by which odours are perceived, 嗅感, 嗅覺
		Smelling-bottle	A bottle containing something calculated to stimulate the olfactory nerves, 香罏, 嗅藥瓶, 聞罏, 嗅壺, 藏藥料以備刺激嗅覺之壺
		Anosmia	Loss of smell, 鼻失齅覺
		Taste	A particular sensation excited by the application of a substance to the tongue, 味覺, 味感;（以下略）
		Gust	The sense of tasting, 辨味之知覺, 味感, 味覺（以下略）
		Gustatory	Pertaining to the sense of taste, 味的, 味覺的, 味感的, 趣味的
		Saporosity	The quality in a body that excites the sensation of taste, 味質, 物所有刺激味覺之性質
		Feel	Sensation communicated by touching, 觸感, 感覺, 感情, 觸覺,（以下略）
		Feeling	Consciousness, 知覺, 清醒; an act or state of perception by the sense, 觸覺之事, 觸覺之情景
		Touch	The sense of feeling, 觸感, 觸覺
		Touching	Touch, 觸; the sense of feeling, 觸感, 觸覺

３．日本側資料における五感表現

3.1　蘭学資料（江戸末期から明治初期）

アレーニの『三山論学紀』などを参考にした[(11)]平田篤胤の『本教外篇』（1806）には、「触覚」の用語が見える。しかも、その部分が前記した『三山論学紀』における引用文の直訳である。

> 故に魂もまた三種あり。一を生魂となし。一を覚魂となし。一を霊魂となす。生魂は草木の発育生長を助け、覚霊は禽獣の触覚運動を助く。



拙論（2020）において、『解体新書』（1774年）またはその後の重訂版（1798年作、1826年刊）にある「関節、血脈、生気、気管、血液、血行、触覚、耳鼓、脊髄」など多くの語は、『医学原始』からの影響を受けて成立した訳語である可能性が高いと指摘した。大槻玄

沢は改訂に当って、王宏翰の『医学原始』や方以智の『物理小識』などを多いに参考し、『医学原始』における「触覚」の用語をも継承しているのである。

内識外知蔵神之府　参閲西書。彼方古来以頭脳為蔵神之府。蓋所出於実測窮理云。凡人之所為知識者。在於頭脳中。其機分之為外内。其外者五知。一曰聴聞。二曰視瞻。三曰香嗅。四曰口。五曰肢体触覚。其内者三識。一曰総意。二曰思想。三曰記性。称之為神機之五知三識。是皆西哲之所定。而今新製訳名者。按明人一訳説曰。人之神有三司。一明悟。二記含。三愛欲。凡学者所取外物外事。皆従明悟而入。蔵於記含之内。異日明悟愛之而欲用之。有従記含中取之是。此与今所訳名目頗相似る。因附載於此。　（重訂解体新書・巻七・巻二名義解）

杉田立卿の『眼科新書』（文化12年、1815）にも、五感の「触覚」と若干違う意味ではあるが、下記のような用例が見られる。

於是乎、鉴神経直為触覚、以達脳神矣
是網膜之易触覚徴知其尤異乎常者也　（眼科新書・巻五・網膜病篇第十三）

これは一種の動詞的な使い方である。青地林宗の『気海観瀾』にも似たような「触覚」の用例が見られる。

夫萬有之使我先為触覚者、以体有度分、体有度分、別彼与此而後我得知其為象為物。〈中略〉然猶有碍性、使我触覚之如此、是故体有度分、必有碍性、所以使我触覚其為物為有也、若其有体使我無触覚、我将焉知為物為有　（気海観瀾・体性）

そして、『気海観瀾』に現代語とほぼ同じ意味で「嗅覚」[12] の使用例が確認できる。

野獣所過、遺臭其地、雖人不覚、田犬蹟之、覔其巣穴、可以知犬之嗅覚過於人
（気海観瀾・体性）

ところで、川本幸民の『気海観瀾広義』では、この部分に対する直接な解釈が見当たらないし、「触覚」「嗅覚」の表現も消えてしまう。一方、五感に関する認識は最初の「費西加要義」に於いて、次のような叙述がある。

費西加者　窮物理之学也　其要先知其物　而後察其用也
物トハ体アル者ヲ指ス、人獣草木金石皆物ナリ。凡我ガ体外ニ在テ能ク吾カ五識ニ触ルル者、皆物ニアラザルハナシ。即チ眼ノ見ルベク、耳ノ聞クベク、鼻ノ嗅グベク、舌ノ味ワフベク、皮膚ノ触知スベキ者、是ナリ。　（気海観瀾広義・巻一・費西加要義）

吉田忠（2020）では、日本における『新製霊台儀象志』の受容について、本書の影響が高橋至時（1764-1804）の『天学雑録』や、麻田剛立、間重富、久米通賢などの著述に見えると論じている。『新製霊台儀象志』に出ている「触覚」という語もかれらの目についたのだろうと思われる。

3.2　西洋知識摂取の新しいルート（「視覚」、「聴覚」、「嗅覚」、「味覚」、「触覚」の成立）

まず、結論から言うと、「視覚」、「聴覚」、「嗅覚」、「味覚」、「触覚」という五感表現の言葉がそろって現れた文献として、筆者が調べた範囲では、日本では遅くとも、1880年の松山誠二纂述の『人身生理学』（明治13年初版、明治15年再版、検定教科書に認定）が挙げられる。

> 凡ソ知覚ニ内知覚及ヒ外知覚ノ別アリ而シテ飢餓ノ二感覚ハ其甲ニ属シ触、味、嗅、聴、視ノ五知覚ハ其乙ニ属ス。
> 外知覚ハ五官即チ五器ノ掌ル所ニ係ル五トハ触官、味官、嗅官、聴官及ヒ視官ノ謂ナリ。
> 故ニ視神経ハ単ニ視覚ノ用ニ適シ、聴神経ハ専ラ聴覚ノ用ニノミ適ス。
> 皮膚ノ触覚ハ其刺衝ヲ受ル所ノ部分ノ広狭ニ由テ大ニ強弱ノ差アル者ナリ。
> 味覚ノ要器ハ舌ナリ。
> 抑々嗅覚ノ理ハ物ノ臭分子空気ニ混淆シテ吸息ノ際鼻穴ニ入リ其鼻涕膜ニ直接シ以テ嗅神経ヲ刺衝スルニ外ナラス…　（『人身生理学・巻之下・五官功用之論』）

本書は当時の欧米の同種類の生理学関係書物を参考していた。

> 此書纂述ノ際引用セシ所ノ書類ハ大略米人フリント氏著人身生理学、同ダルトン氏著人身生理学、同ラウソン氏著俗間生理書、同カットル氏著生理及解剖論、同ハチソン氏著生理及健全学、同ハルツホルン氏著生理及解剖論、英人カルペントル氏著人身生理学、同氏著精神生理論、同キルクス氏著人身生理論等ナリ　（『人身生理学・凡例』）

松山誠二は『音引生理訳語集』（明治十三年1880）を出したこともある。当訳語集は「イロハ」順に「生理書中最モ緊要ニシテ且屢々用フル所ノ訳語ヲ輯メ訓注シタル」（同書「例言」）もので、「視覚」「聴覚」「嗅覚」「味覚」「触覚」の各語を収録している。

> （チ）聴覚　キクコト、嗅覚　カグコト
> （ミ）味覚　アジワフ
> （シ）視覚　ミルコト、触覚　フレシルコト

松山誠二の訳書以前に、ひとつ注目すべき訳書がある。即ち西周（1829-1897）訳の『心理学』である。西は江戸幕府の一員としてオランダに留学した際に実証的な哲学にふれ、心理学を学んでいた。彼は明治三年（1870）頃に行われた講義「百学連環」で心理学について紹介していた。また，ヘヴンの “Mental　Philosophy: Including the Intellect, Sensibilities　and Will” を翻訳して、明治八～九年（1875-76）に『心理学』として出版した。[13] 本書には五感のうち、「触覚」の一語しか見られないが、「視聴嗅味覚ノ五官」という表現があり、従来の漢学における「耳目口鼻身の五官」の表現より、現代語的な感じを持つようになっている。これは前記した中国初期漢訳洋書における「視聞啖嗅触の五官」との表現から触発されたかどうかわからないが、松山誠二の訳語のヒントになったかもしれない。

> 五官ノ助無シテ、此美麗潔浄ノ世界ニ、往来スルヲ得ムヤ、又レカ、視聴嗅味覚ノ五官ニ於

ケル、其各自ノ功徳ノ為ニ、上帝ヲ感荷セザルコトアラムヤ。　（心理学・巻二）
解剖学ニテ、其組織ヲ別チ、各一官ナリト云ウ。即チ耳ヲ一官トシ、目ヲ一官トスルガ如シ、是蓋シ神経ノ器ノ別部ナルコト、猶臭ト味トノ別ナルガ如シ、唯神経ノ全体ハ、体ノ全面ニ布蔓シテ、触覚ノ総覚性ニ、帰スル者ナリ。　（心理学・巻二）
且全論ニ附加シテ、論スベキコトアリ、触覚ノ官ヲ除キ、又見ルノ官モ、殆ド除キ、其余ノ官ハ、外部ノ物ニ就キテ、絶エテ媒介ナキ直チナル知識ヲ、呈スルコトナキナリ。
（心理学・巻二）

但し、西の『心理学』はその後何度も再版されるが、この部分の訳語はずっとそのままであって、「触覚」以外の各語は依然として見えてこない。

西周訳『心理学』も松山誠二訳『人身生理学』も、明治期に入ってからの英学の隆盛に伴って、現われた翻訳書である。その以降、生理学や心理学関係などの多くの書物に、「視覚」「聴覚」「嗅覚」「味覚」「触覚」の五官表現は出揃っている。

一方、中国では「視覚」「触覚」は中国初期洋学書の『性学觕述』や『医学原始』に見られるが、そろって現れたのは随分後のことであり、次節で述べたように、日本からの逆輸入によるものと思われる。

4．西学東来

既に多くの先行研究で指摘されたように、日本語から中国語への語彙（和製漢語）流入は大きな流れとしては中日甲午戦争（即ち日清戦争、1896年）以降のことである。つまり、清国留学生派遣、中国での日本語教科書や各種専門辞典の翻訳からである。[14] 顧燮光のが『訳書経眼録』（1934年）の序文において、次のように述べている。

日本文訳本，則以光緒甲午我国與日本構衅，明年和議成，留学者咸趨其国，且其文字訳較他国文字為便。于是日本文之訳本遂充斥于市肆、推行于学校，幾使一時之学術寝成風尚。而我国文体亦遂因之稍稍変矣。

次には、いくつか漢訳日本書における五感表現の用例を挙げておく。

4.1 『初等心理学』（広島秀太郎著、田呉炤訳、1902年）

日本学者訳此類書多融会西文之義、綴以漢字、蓋幾経揣練而成有顛撲不破之致。
今訳為中文、若欲易其術語使合我国文字固有之体裁、不惟力有不能、且恐失其本意、故仍之。
（光緒二十八年二月訳者識）

第二章　智力之性質　第三節　感覚各論
一　味覚　位置　味覚者為分布於下及口中。有感覚神経之一種味覚神経、由其末端受刺戟而起者也。
二　嗅覚　位置　鼻腔内、上有粘膜。此処為感覚神経之一種嗅覚神経。其末端受刺戟

三　触覚　位置　全身之皮膚感覚神経、分布殆遍。而其末端、皆感所接触之外物刺戟。

四　温覚　位置　感寒暖之神経。与触覚神経、雖為別物、而其位置即与触覚神経之所在、大抵相同也。

五　筋覚　位置　筋肉伸縮、則感其変化。而筋肉中有其末端之神経分布也。

六　聴覚或音覚　位置　内耳之機関中有感覚神経之一種聴覚神経、其末端感音之刺戟。

七　視覚即光覚　位置　眼球内部網膜、其末端有感覚神経之一種視神経。

4.2 『普通百科全書』（1903年、上海会文学社）

『生理学問答』（第19冊、巻18）/ 五官

耳為聴覚之器。

眼為視覚之器。

嗅覚器即鼻之外部、〈中略〉、是即司嗅覚之処。

味覚之中心為下。

触覚器之官能、〈中略〉、本書総称之云触覚。

『教育学新書』（第51冊、巻50）/ 第二章　知識教育　第四節　感覚

感覚亦有六種、名之為聴覚・視覚・嗅覚・味覚・触覚・筋覚。

4.3　服部宇之吉の『心理学講義』（東亜公司 / 明38.11,1905/ 東京）

服部宇之吉（はっとり うのきち、1867-1939）は、中国哲学者。東京大学卒。東京帝国大学教授、ハーバード大学教授、東方文化学院院長などを歴任。帝国学士院会員。福島県出身。1899年文部省より清国・ドイツへの４年間留学を命じられる。1900年に清国留学中に義和団事件に遭遇、北京在留の日本人・日本軍とともに籠城し歩哨活動を経験。年末にはドイツに出発。1902年に ドイツ留学半ばで文部省の清国出張の命により帰国。東京帝大文科教授・文学博士授与。北京に赴き大学堂速成師範館（大学教育学部に相当）の総教習に任じられる。1909年に帰国。清国より文科進士を授与。東大に復帰、支那哲学講座主任となる。『心理学講義』は氏が清国京師大学堂師範館学生に講義したものをまとめた本である。その凡例において、次のように述べている。

一、本書係因予所講授清国京師大学堂師範館学生之稿本而増損潤色者。〈中略〉

三、奏定学章程綱要有不許用新語之不雅順者一条、然学術随時而進歩、学者随事而創作、新語亦勢所不能免也。創作新語、中国不乏其例。春秋戦国諸子暫舎而不論、即唐代玄奘等訳仏典亦多用此法。蓋伝外国之学術宗教者、自己国語苟無適当之語、即不得已而用此法也。玄奘等所創作之新語、在当時未必皆雅順、而今人則不復問其雅順与否。由是観之、語之雅順与否、畢竟慣与不慣而已。今中国正当広求知識於外国之時、而敢問語之雅順、或因此致阻碍学術之発達、則豈能免転倒本末軽重之譏乎。本書所用学語、専据日本学界常用之語、其中或有所謂不雅順者、然在日本則既已通行、而在中国又無可代用、毋寧仍用之、非敢蔑明章也。

本書の構成は下記に示された通りである。五感について論じる箇所は第一篇第一章の「感覚」の各節である。

心理学講義目次

提要

第一節　心理学釈義／第二節　心之発動／第三節　身心之関係／第四節　心之発動与心識／第五節　心理学与他学之関係及異同／第六節　心理学之門類／第七節　心理学之研究法／第八節　講義之次第

第一篇　知之作用及其理法

提要

第一章　感覚

総論／第一節　味覚及嗅覚／第二節　触覚／第三節　聴覚／第四節　視覚／第五節　筋肉感覚／第六節　感覚之主観性／第七節　感覚之発達

第二章　知覚

総論／第一節　触覚的知覚／第二節　視覚的知覚／第三節　時間知覚／第四節　幻覚／第五節　融会作用

第三章　想像（不分節）

第四章　思想

総論／第一節　概念／第二節　断定／第三節　推測／第四節　思想之発達

第二篇　情之作用及其理法

提要

第一章　恐怖及忿怒

第二章　同情及愛情

第三章　自我之情

第四章　異性相愛之情

第五章　情之簡単者進而成複雑者之理

第六章　社会的情及道徳的情

第七章　宗教的情

第八章　悦美之情

第九章　知的情

第三篇　意之作用及其理法（不分章）

本書は五感表現の各語の中国語における定着に大きな役割を果たしたのではないかと思われる。

4.4 『最新動物学講義』（飯島魁著、西師意訳、1907年、東亜公司出版）

動物、自識其与外界之関係、皆因於感覚。如高等動物、感覚有五。曰触覚、曰味覚、曰嗅覚、曰聴覚、曰視覚。謂之五官。　　（最新動物学講義・第十九章　動物感覚器官、二百五ページ）

以上見てきたように、五感を表わす各語は20世紀初頭の漢訳日本書を通じて、医学（生理学）、哲学、心理学、教育学、動物学など、多岐の分野にわたって中国に紹介され、次第に定着するようになったかと思われる。

注

（1）『トートラ人体解剖生理学』Gerard J.Tortora, Bryan Derrickson 著、佐伯由香ら編訳、丸善出版2014年、pp.320-351を参照。

（2）「五官」には主に、①五感を感じる器官：目–視覚、耳–聴覚、鼻 - 嗅覚、口–味覚、皮膚–触覚；②漢方では、耳・目・鼻・口・舌をさす；③面相の眉・目・耳・鼻・口という三種類の意味があるが、本稿でいう「五官」は特別説明を加えていない限り、①の場合を指す。

（3） 池田知久『馬王堆漢墓帛書五行篇研究』汲古書院、1993年２月15日発行。pp.136-149を参照。

（4） 2016年９月27日にこれより古い時代の661年に刻まれた玄奘訳の石経が北京房山で発見されたという報道があった。

（5） この書物の解題について、周振鶴主編『明清之際西方傳教士漢籍叢刊　第一輯⑤』（鳳凰出版社、2011年10月）の董少新の「提要」を参照されたい。

（6） 中国名は艾儒略。イタリア生まれのイエズス会宣教師。1613年、中国に入り、徐光啓らとともに中国各地に伝道、中国語に通じ、西洋の数多くの書物の中国語訳を行った。『職方外紀』（1623）『三山論学記』（1625）『西学凡』（1625）などの著書があり、いずれも『天学初函』（1628）に収められよく知られている。

（7）『三山論学記』は杭州で刊行されたアレーニの著作である。三山は場所の名で、そこで著者と葉閣老との問答のかたちで儒教および仏教を批判、かわってキリスト教の教えが説かれている。本書は江戸時代に、寛永の禁書令以後も写本のかたちで広まり、平田篤胤の『本教外篇』は、アレーニと葉閣老との問答を、自分と儒生との問答に置き換え、その復古神道に大きな影響を与えたとみられる。

（8） 高晞.「解剖学中文訳名的由来与确定 - 以德贞『全体通考』為中心」. 歴史研究，2008,（6):80-104.

（9） 筆者が利用したは『富強斎叢書続集』第十七冊所収の版本である。

（10） 中央研究院近代史研究所の数位資料庫を利用させて頂いた。

（11） 詳しくは海老原（1958)、及び小畑進「神道と基督教の接触 —— 平田篤胤神学ノート」を参照。

（12） 唐の斉已（863-937）の『咏茶十二韻』に「嗅覚」の字面がみえるが、動詞的な使い方である。
百草譲歩為霊，功先百草成。甘伝天下口，貴占火前名。出処春無雁，收時谷有莺。封題従澤国，貢献入秦京。嗅覚精新極，嘗知骨自軽。研通天柱響，摘绕蜀山明。賦客秋吟起，禅師昼卧驚。角开香满室，炉動绿凝铛。晚忆凉泉对，閑思异果平。松黄干旋泛，云母滑随傾。颇貴高人寄，尤宜别匮盛。曾寻修事法，妙尽陸先生。

（13） サトウタツヤ「近代日本における心理学の受容と制度化」『立命館人間科学研究』第５号、2003年３月。Pp247-258

（14） 荒川清秀『近代日中学術用語の形成と伝播 —— 地理学用語を中心に ——』白帝社、1997年10月初版、pp.133。

参考文献

1．海老原有道（1958）『南蛮学統の研究』、創文社

2．沈国威（2000）「“泰西人身说概”（1623）から“全体新论”（1851）まで —— 西洋医学用語の成立について」『中国文学会纪要』（21)、2000年、pp.1-18

3．冯天瑜（2004）『新語探源 —— 中西日文化互動与近代漢字術語生成』. 中華書局、2004年10月

4．高晞（2008）「解剖学中文訳名的由来与確定 - 以徳貞『全体通考』為中心」『歴史研究』（6）、2008年、pp.80-104
5．松本秀士（2006）「ホブソン（合信）にみる解剖学の語彙について」『或问』（No.11）、2006年、pp.101-118.
6．佐伯由香・細谷安彦・高橋研一・桑木共之　編訳『トートラ人体解剖生理学』丸善出版、2014年
7．鷲尾厚　『復刻　解体新書と小田野直武』、無明舎出版、2006年８月
8．立教大学図書館海老沢文庫所蔵『三山論学紀』道光二十七年（1847）、武林天主堂版の写本
9．吉田忠（2020）「『新製霊台儀象志』の受容」、陳捷［編］『医学・科学・博物　東アジア古典籍の世界』所収、勉誠出版、2020年２月、pp.145-174.
10. 舒志田（2002）『近代日中語彙交渉史 ── 新漢語を中心に』九州大学博士学位論文、2002年１月
11. 舒志田（2020）「『医学原始』の語彙について ── 日本の洋学への影響を中心に ── 」『或問』第38号、近代東西言語文化接触研究会（編）、白帝社、pp.39-54
12. 松山壽一（2011）「享保期における改暦の試みと西洋天文学の導入」、笠谷和比古［編］『一八世紀日本の文化状況と国際環境』所収、思文閣出版、2011年８月
13. 和田光俊（2011）「漢訳西洋暦算書と『天学雑録』」、同上
14. 児玉齊二（2000）「顔永京と漢訳心理学用語について」『心理学史・心理学論』２、2000年10月、pp.25-33
15. 陳力衛（2019）『東往東来：近代中日之間的語詞概念』社会科学文献出版社、2019年

（じょ　しでん　立教大学兼任講師・日本学研究所研究員）

（後記：本稿は2020年12月12日に上海外国語大学と漢字文化圏近代語研究会が共催した「東アジア言語における漢字語彙の過去現在と未来』という国際シンポジウムでのオンライン発表をもとに、加筆修正したものであります。）